

廻向のみ名

花

昨夜、見る間に開いたサボテンの花が、今朝はもう醜く凋んでいきます。短い花の命です。

たった十五歳になった清子ちゃんは、肺を患って、重い枕の床についています。死を観念して、私の行くのを喜んで待っています。

おとなしい清子ちゃんは、可愛そうに、病気が悪いので、可愛い弟妹たちからも遠ざけられて、午後になると襲うて来る高熱に、すっかりやられています。しかし、み仏の話になると、眼を大きくして時々うるませつゝ、熱心に聞いています。素直に手を合せて念仏しつゝ。どうしても散ってゆく荅の花。

死の前に

「どうして私は、弱いお母ちゃんから生れたのでしょうか。」

七つの時、同じ病で亡くなった先のお母ちゃんのことです。宿業感とは、この小さい魂も知らねばならぬ。死の幕の前に。

死の前に………老いも、若きも、善人も、悪人も、総理大臣も、女学生も、唯、厳肅な戦慄のみが残ります。

善でも越せず、悪でも越せず、学問でも越せず、貧富でも越せず、その他何でも越せない死の幕。

その時、たった一つものを言うて下さるものは、如来招喚のみ声のみであります。

彼岸

生死。生れて死ぬる間には、色々ときみ入った事が私どもの周囲におこります。死を考えない限り、それぞれ価値のあることであり、意味のあることであります。しかし死によって反省された生に何があるでしょう。みな過ぎ去ってゆく、うたかたの夢であり、虚仮そらごとであります。

善導大師は、往生礼讃偈の中に説かれました。

諸衆等聴説日没無常偈 諸の衆等聴きたまへ、日没の無常偈を説かん。

人間忽々営衆務 人間忽々として衆務を営み

不覚年命日夜去 年命の日夜に去ることを覺らず

如燈風中滅難期 燈の風中に滅せんこと期し難きが如し

忙忙六道無定趣 忙々たる六道定趣なし

未得解脱出苦海 未だ解脱して苦海を出づることを得ず

云何安然不驚懼 云何ぞ安然として驚懼せざる

各聞強健有力時 各聞け強健有力の時

自策自勵求常住 自策自勵して常住を求めよ。

亡ぶより外何ものをも持ち合せていない自分を凝視^{みつ}める時、人は初めて彼岸^{あのよ}のものに眼をそゞぎます。

常住なる彼岸からの門は、永久に、何時も開かれてあつても、人は心の扉を閉ぢ、六道に執着して、求めようともしませぬ。還ろうともしませぬ。しかしそのままでは、ついに真の安住はあり得ませぬ。

人は、此岸の真相にさめる時、彼岸に向つて眼を開く。

如来の名

如来の名………生、老、病、死より外、何ものも持ち合せのない我等に、永遠に滅ばない唯^{ただ}一つの生命が廻向せられる。それが如来の名号でありました。

不可思議な因縁が、人を聞法の世界につれ出します。み法は必ず人を内面へくつとつれてゆきます。如来の大慈悲が人の心を、おさまし下さつて、そのほんとうの相を知らされて来ます。

「私はあまりにふざけておつた。何と言う私の不真面目な、懈怠な生活であつたであろう。」誰の心にも失つてもく、失いきれない、衷心の声があります。墮落してもく、墮落しきれない魂の声であります。

そしてこの魂の聲が、教えと共に罪悪煩惱の塵芥の底から、上に現われて来はじめると、苦しみ悶えて来はじめますが、やがてどうしようもない宿業にさめきる時、静かに合掌礼拝して、彼岸の光に合掌します。

その時、如来のすべてである名号は、信心となり、念仏となつてこの人の上に廻向せられてあります。大悲が骨髓^{とね}に徹^とりたもうことでもあります。

懺悔

善導大師は、厳肅な往生人でありました。静かに、一日昼夜六時に聖勤された往生礼讃を、頂きます時、襟を正さないではいられぬものがあります。大師は具さに、安養浄土に至心に往生せんことを求め、仏の前に、菩薩大士の前に、くり返しく懺悔し、感謝し、讃嘆していられます。そして、「願くば諸の衆生と共に安樂国に往生せん。」と願つていられます。

「至心に懺悔す。無始の身を受けしより来、恒に十悪をもつて衆生に加ふ。

父母に孝せず三宝を謗し、五逆不善業を造作す。

是の衆罪の因縁を以ての故に、妄想顛倒して纏縛を生ず。

應に無量の生死の苦を受くべし、頂礼し懺悔す。願くば滅除せしめたまへ。

懺悔し己りて、至心に阿弥陀仏に帰命したてまつる。」と。

何という沈痛な懺悔であろう。

死の扉の前には、すべてがただ滅ぶべきものであるばかりでなく、そこには、無量の生死の苦と共に、深い罪悪業障のもつれがあります。

聖人の「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもて、そらごとたはごとまことあることなきに、たゞ念仏のみぞまことにておはします。」との告白も、肯かれることであります。

罪惡より外ない我等に、滅ばない功德宝海を廻向して下さるのが、念仏であります。

濁悪世に

尊いみ法を聞きつゝも、人の世の濁悪にあふられ、大苦に見舞れる時「宗教など求めていられるか」と根底から、聞法の心を覆すような悪魔が、心内におしよせて来ます。その時、静かに苦の源を考え、死を思い、釈迦、親鸞を憶い、衷心の魂の声を呼びさまして、この声こそ、恐るべき悪魔の誘惑であることを知って、念仏の心に帰るべきであります。善導大師は、

「濁世の難に還り入れば、浄土の願彌深し。」

と言つていられます。人生の苦難に会うえば会うだけ、濁悪に入れば入るだけ、念仏の心いよゝ深く冴え渡るに至るまで、至心に求道精進して、念仏三昧になりきらして頂かなくてはなりません。

「業深きは行き易きことを成じ、因浅きは実に聞き難し。

必ず望むらくは疑惑を除きて、超然として獨り群らざれ。」

御親切な誠めであります。

幸の不幸

もし、人、この世の幸福に恵まれたが故に、それに囚われて道を求めることなく、五欲煩惱だけで跳つて、この世を徒食することは悲しいことであります。かゝる人も、もし一度人間苦に当面するなれば、何ものもない自分を曝露するでありましょう。今恵まれて幸福に笑つていたとて、それは真実のものではあり得ません。

人生の意味は、五欲よりも深いところになくはなりません。廻向のみ名の深さを憶う時、念仏の子は、深い喜びと、人の世の様を見てどうしようもない悲しみを、持たないではられません。

千万人中の幾人が、この深い念仏にふれて生きるのでありましょう。

安立

大聖世尊にも、菩提樹下における悪魔との戦いがありました。

内へくと如来のみ心に帰る時、心内外の悪魔煩惱は必死の妨害を加えるであります。しかし決して退くことなく求道すべきであります。やがて如来の真実は、一切の疑惑を打ち砕いて、すべては懺悔の色に染められるであります。

「心は、真慈を帯びて満ち、光は法界を含んで円なり。無縁(大慈悲)能く物(衆生)を摂す。」

真実の大慈悲が衆生の心に満ちわたり、法界に徧きみ光が、摂取不捨して下さる時、一切の戦いがやみ果てて、恭敬礼拝の心には、真実の安らぎが恵まれて来るであります。

廻向のみ名のみ、常住にして金剛不壞なる永遠安立の道であります。

死の帳の前に立った時、身も心も亡んでゆくべきものに、たった一つ見出された尊い生命であります。すべてから突き放された時、懐いていて下さるみ親があります。それ故にまた人生は生きるに恵まれたところであります。亡ぶべきものと、亡ばざるものとの見分けのつく眼を与えられ、亡ばざるものに合掌帰命して生きる人は、人生及び我の本質に覚めて生きる人であります。人はあまりに苦しむべからざるを苦しんでいます。喜ぶべき真実に触れないが故に。

今朝、特に廻向の名号の尊さを憶念いたします。